



▲ 大正7年度 北浦尋常高等小学校卒業写真（大正8年2月17日） 渡部嘉子氏提供

写真は、大正七（一九一八）年度の北浦尋常高等小学校卒業写真です。

日本では、明治五（一八七二）年に国民皆学を目指し学制が公布され、全国を八大学区に分け、一大学区を三十二中学区、一中学区を二一〇小学区に区分しました。これを受けて、宮崎県は小学区分ごとに小学校を設立しよう通達、地域により時期差はありましたが、県内に小学校が設立されていきます。

旧北浦町域には、廃藩置県後、古江村・市振村・宮野浦村・三川内村が存在していました。このうち、明治七（一八七四）年に古江村に古江小学校が設立されます。古江小学校は当初村落小学として発足しましたが、明治九（一八七六）年四月に尋常小学に認可され、正規の小学校教育が行われるようになりました。古江小学校に次いで、市振小学校・宮野浦小学校などが設立されました。

明治二十二（一八八九）年、町村制施行に伴い、古江・市振・宮野浦・三川内村が合併して北浦村が誕生しました。同四十二（一九〇九）年、北浦村では教育振興や経済状況が検討され、古江・市振・宮野浦・直海の各小学校が合併して北浦尋常小学校が設立されました。二年後の明治四十四（一九一一）年には高等科が併置され、北浦尋常高等小学校と改称されました。

【参考文献】『北浦町史 史料編第一巻 町内文書』（北浦町、一九九四年）



# 延岡にゆかりの駅弁の掛け紙



駅弁は、駅構内や車内で販売される旅客向けの個性豊かな弁当であり、鉄道旅のお供として多くの方に親しまれてきた、日本特有の文化です。

そのはじまりについては、諸説ありますが、明治一〇年代には販売が開始され、鉄道網が全国に広がるにつれて、駅弁の販売も広がりをみせていきます。



1：御 寿 司 福寿亭、昭和 10 年代前半か、20 銭  
 2：特製御弁当 杉の家、昭和 38 年、150 円  
 3：幕の内弁当 杉の家、昭和 38 年、150 円

延岡では、大正十一（一九二二）年に鉄道が開通し、翌年に日豊本線が全通します。延岡でいつから駅弁が販売されたのか定かではありませんが、確認できる最も古いものは、福寿亭が製造した「御寿司」です。販売された年代は、掛け紙の調整印が判読できないため残念ながら詳細不明ですが、「金二十銭」の値段表示と鐵道省の標語をもとに、昭和一〇年代前半のものと推定されます。

このような時代を反映する様々な情報に加えて、販売されている土地ならではの名所名物や流行のデザインが施されることにより、駅弁の掛け紙は人々を惹きつけています。

これまで延岡にゆかりの駅弁の掛け紙として十六点を提供いただいています。これらの掛け紙に採用されたデザインに着目すると、延岡ならではの情景が採用されています。その一つが城山の鐘です。福寿亭製造の「御寿司」では、城山を代表する桜とともに描かれています。昭和三十八（一九六三）年に杉の家が製造した「特製弁当」では、旅を愛した歌人若山牧水の歌「なつかしき城山の鐘なりいでぬおさなかりし日聞きしごとくに」とともに描かれており、鐘の音にも思いをはせる延岡ならではのデザインとなっています。

現在でも本市のランドマークとして、各種ポスターなどでイメージ化される旭化成の工場や煙突についても、駅弁の掛け紙のデザインとして用いられています。杉の家が製造した昭和三十八年の「幕の内弁当」では、城山の鐘と鮎という延岡名物とともに煙突が連立する工場が描かれています。掛け紙に化学工場を用いる異色のデザインは、旅客に延岡工業都市という印象を強く与えたのではないのでしょうか。

このようにユニークな駅弁の掛け紙は、絵葉書と同様に、その時々を反映した資料として、製造された当時の延岡について伝えてくれます。

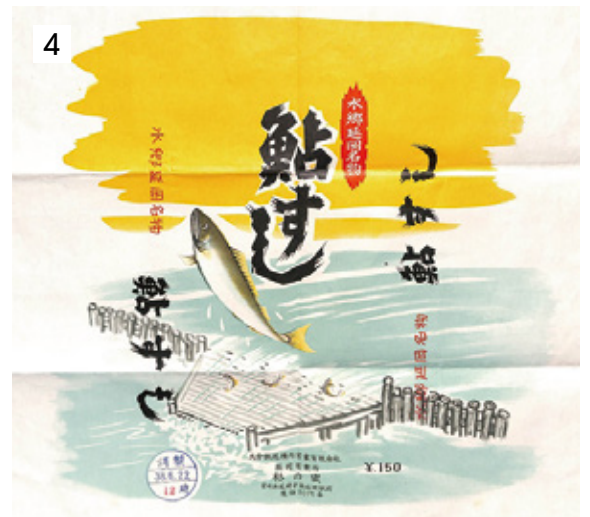
今回提供いただいた資料の多くは、昭和三〇年代から四〇年代にかけてのものになります。この時期は高度経済成長期を背景に旅行ブームを迎えており、主要な移動手段であった鉄道旅行の広がりに伴い、駅弁も多様化が進み、よりご当地色のあるものへと変わっていきます。延岡においては、水郷の名物である鮎を用いた駅弁が登場します。

杉の家では、昭和三十五（一九六〇）年から「鮎ずし」の販売を開始します。一尾の鮎をそのまま使っていることに加え、舟形をした独特の木製容器も相まって人気を博しました。その後、寿司が苦手な人もターゲットとした「鮎のかば焼き弁当」が昭和四十五（一九七〇）年に誕生します。こちらは、温かいうちに食べてもらわねば味が落ちるということで、正午前後に延岡駅に停車する便の旅客を対象とした限定商品となっていました。

また、鮎の弁当ができないシーズンにも、お客さんに喜んでもらうと考案されたものが、「釜めし」です。椎茸などの延岡を代表する山の幸が用いられていることに加え、発売当時、九州内で駅弁として釜めしを販売していた駅が博多駅と延岡駅ぐらいであったこともあり、旅客に喜ばれたそうです。また、「容器はそのままご家庭で一合の御飯がおいしく炊けます」と添え書きがあり、食べたあとも楽しめる仕様になっています。

こうした特色ある駅弁も、鉄道の高速度による利用時間の短縮に加え、交通網の発達などによる旅客の減少の影響もあり、地方を中心に激減していきます。残念ながら延岡もそのひとつとなり、現在では姿を消してしまいました。

市史編さん事業では、延岡に関係する様々な資料を収集しています。ご家庭や職場等に資料がございましたら、ぜひ情報をお寄せください。



- 4：鮎ずし 杉の家、昭和38年、150円  
 5：鮎のかば焼き弁当 杉の家、昭和45年以降、600円  
 6：釜めし 杉の家、昭和38年、金額不明  
 7：椎茸弁当 梅の家、製造年代及び金額ともに不明

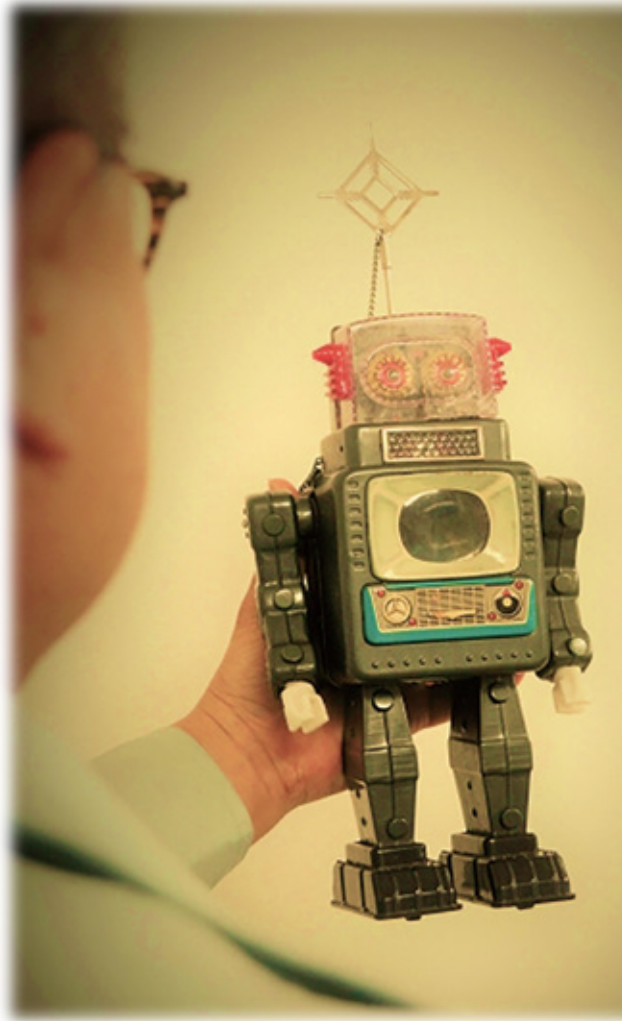
【参考文献】

- ・『駅弁読本』（上杉剛嗣、樫出版社、二〇一一年）
- ・『宮崎日日新聞』（一九六一年二月三日）
- ・『宮崎日日新聞』（一九六七年一月九日）
- ・『宮崎日日新聞』（一九七一年五月一日）
- ・『宮崎日日新聞』（一九八三年四月二十五日）



# 懐かし〜♪ブリキのおもちゃ「昭和レトロ」ブリキのおもちゃ

温もりを感じる金属…不思議な素材「ブリキ」温かな思い出とともに大切に保管されていたブリキのおもちゃ達を紹介します。



## TELEVISION SPACEMAN ALPUS / MADE IN JAPAN

電動のブリキのロボットです。アンテナの抜き差しでオン・オフになります。両目が回転し、口が光り、胸部のテレビ画面に飛んでいる宇宙船が浮かびあがります。両手を動かしながら、二足歩行します。

昭和を知らない若い世代を中心に「昭和レトロ」がトレンドになっていると聞きます。「平成レトロ」との言葉も聞かれ、昭和に生まれ、平成の世を生き、二度の改元を目の当たりにした私と同世代の方々は、ちょっとした衝撃を受けているのではないのでしょうか。これまでもレトロブームは幾度かありましたが、令和の「昭和レトロ」は一九六〇〜八〇年代の家具や家電、食器、純喫茶やクariumソーダなど幅広いモノやコトが対象となっています。

そこで今回は、市民から提供いただいた昭和レトロな雰囲気漂う素材「ブリキ」によって作られたおもちゃを紹介しています。ひと頃、テレビ番組で高額の鑑定が付くなどブームとなった「ブリキのおもちゃ」ですが、ここに紹介しているおもちゃは一九六〇年代に延岡で実際に遊ばれ、その後、思い出と共に大切に保管されてきたモノたちです。

ブリキとは錫（スズ）でメッキを施した鋼材の薄板のことで、腐食しにくく、接着性もよく、毒性がないことなどから缶詰の容器等に利用されてきました。その加工しやすさや金属でありながら印刷できる特色は、おもちゃの素材としても重宝されていきます。さらに、軽くて落しても壊れにくい点も、おもちゃ作りに適していました。



## M-34 TANK (株)増田屋齋藤貿易 / MADE IN JAPAN

ゼンマイ式のブリキの戦車です。キャタピラはゴム製で、キャタピラタイヤにはプラスチックが使用されています。戦車上部のハッチを開くと中に搭乗員が描かれているなど、細部にこだわった彩色が施されています。



**鉄人 28号機関銃 AS-1002**  
 榎野村トニー / MADE IN JAPAN

ブリキのおもちゃの銃です。引き金を引くとタタタタンと銃声のような連続音が鳴り、2連になっている銃口が、交互に前後します。また上部の赤い窓の部分が光ります。昭和39(1964)年頃から「鉄人28号」や「鉄腕アトム」などTV放映され人気を博した作品の玩具が登場します。



**SPACE TANK M-18**  
 榎増田屋齋藤賢易 / MADE IN JAPAN

電動のブリキの車です。電源を入れると変動的な動きで前進しながら、アンテナが回転し、後部のライトが赤、緑と点滅し、操縦士の右手が上下します。

日本での「ブリキのおもちゃ」づくりは、明治初期に輸入されたおもちゃを模倣することから始まります。元来「からくり」に関する知識や技術があった日本の職人は、その内部の構造をも正確に模倣し、次第に、より精巧なオリジナルの製品を作るようになります。第一次世界大戦(一九一四～一九一八年)で、ブリキのおもちゃの発祥国であり最大の生産国であったドイツが敗れると、欧米で日本製の需要が高まり、輸出の柱へと成長していきます。ところが、太平洋戦争(一九四一～一九四五年)が始まると、一転して国内で金属製おもちゃの製作が禁止され、さらに欧米で日本製品の輸入が禁止されるなど、日本製ブリキのおもちゃは姿を消してしまいます。しかし、戦後、日本経済の復興に玩具産業は大きな役割を果たしていきます。資材不足の中、アメリカ進駐軍が廃棄する空缶に着目し、ブリキのおもちゃとして再生させたことをきっかけに、次第に以前の水準以上の製品を作り始めます。技術力の高い日本製は欧米での評価を上げ、アメリカ向けの輸出が急増し、一九五〇～一九六〇年代にかけて最盛期を迎えます。その後、一九七〇年代になるとプラスチックなどの新素材の登場により生産量が次第に減少し、現在ではほとんど見られなくなりました。

素材のもつ温もりある雰囲気と確かな技術力で製作された昭和の日本製「ブリキのおもちゃ」は、いまだに評価が高いコレクターズアイテムの一つです。遊んだ記憶のある方は、今一度、自宅や実家の押し入れなどを探してみたいかがでしょうか。見つけた際には、見せていただけると嬉しいですよ。



**日本航空ジェット旅客機 CV880 型**  
 榎野村トニー / MADE IN JAPAN

電動のブリキの飛行機です。電源を入れると前進し、エンジン部が赤く点滅します。

CV880は、アメリカのジェネラル・ダイナミクス社製の中型ジェット旅客機です。日本の国内線初のジェット旅客機として人気を誇りましたが、トラブルが多く、運用は短期間で終了します。

**旭化成供給所の値札シール**

製品の箱に旭化成の社章が入った値札シールが残っており、旭化成の供給所で購入されたものとわかります。供給所は、旭化成の前身である日本窒素肥料が、従業員が日用品などを購入するための福利厚生施設として設置しました。しかし、市中の価格よりかなり安価であったため、一般の市民も多く利用するようになり昭和43(1968)年に「旭化成サービス」となり、一般企業として小売業を行うようになります。「旭化成サービス」は平成8(1996)年に解散しました。



# 「ブリキのおもちゃ」の商標(トレードマーク)

今回、紹介した「ブリキのおもちゃ」を観察していると、商標(トレードマーク)が目に入りました。いずれも玩具メーカーの商標ですが、現在は見かけなくなっているものもあります。ブリキのおもちゃの製造は一九五〇年代から六〇年代にかけて最盛期を迎え、数多くの金属玩具メーカーが活躍しました。現在、その多くは倒産や廃業をしています。今回の「ブリキのおもちゃ」では、最盛期に操業していた四社の商標を見ることができました。

「TELEVISION SPACEMAN」には、「アルプス商事株式会社」の商標が箱にのみ印刷されています。アルプス商事は昭和二十九(一九五四)年に創業、輸出用の玩具を多く手掛けており、「TELEVISION SPACEMAN」も箱の説明書き等は全て英語です。一九八〇年代に玩具事業から撤退したようです。「M34 TANK」と「SPACE TANK M-18」は、それぞれ箱と本体に「株式会社増田屋齋藤貿易」の商標が印刷されています。増田屋齋藤貿易は、江戸時代中期の享保九(一七二四)年に創業、三世紀を経た現在も株式会社増田屋コーポレーションとして玩具の製造や輸出入等の事業を展開しています。「鉄人28号機関銃 AS1002」は本体に「株式会社野村トイ」の商標が、「日本航空ジェット旅客機 CV



## 商標(トレードマーク)

上から、アルプス商事(株)  
増田屋齋藤貿易(株)  
野村トイ(株)  
日光玩具工業(株)

## MADE IN OCCUPIED JAPAN

MADE IN OCCUPIED JAPAN (メイドインオキュパイドジャパン)という言葉を知っていますか? 「占領下の日本製」という意味で、太平洋戦争後に民間貿易が再開された昭和22(1947)年から、サンフランシスコ講和条約が発効する昭和27(1952)年までの間、日本からの輸出品に表記が義務付けられていました。当時、輸出された品は陶器やカメラなど様々です。もちろん、ブリキのおもちゃも多くが輸出されています。わずか5年間という短い期間の刻印で、希少価値があるためコレクションアイテムとして人気があります。

880」は、箱に「株式会社野村トイ」、本体の水平尾翼裏に「株式会社野村トイ」と「日光玩具工業株式会社」の商標が残っています。日光玩具は野村トイと共同で海外輸出用に玩具を製造・販売していました。野村トイは一九五〇年代にブリキのおもちゃの製造・販売を始め、現在も高額で取引されるような多くのヒット商品を生み出します。ブリキのおもちゃが下火になって以降も、テーブルゲームなどでヒット商品を生み出していきます。平成四(一九九二)年にアメリカのハズブロ社に買収され、その後、平成一〇(一九九八)年に解散をしています。

戦後、日本経済復興の一翼を「ブリキのおもちゃ」で担った、数多くの金属玩具メーカー、ブリキのおもちゃを見る機会があれば、その多彩な商標にも注目してみてください。

# 部会通信

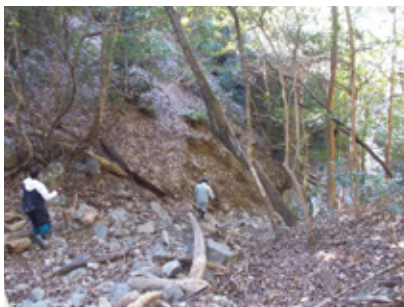
## 中世部会



▲史料調査風景(えびの市歴史民俗資料館)

五月に実施した市内の神社が所蔵する棟札及び古文書の調査、並びに石塔の調査に続いて、十一月には、えびの市にて南北朝時代の古文書の調査を行いました。三月にも市内及び県北地域での史料調査を予定しています。今後は、これまで調査した史料を整理しながら本編の執筆に向けてのデータベース化を進めていきます。併せて、来年度からは県外にある史料調査も行っていくことにしています。

## 古代部会



▲現地踏査風景(梓峠)

上半期に続き、延岡市域における古代官道ルートの検証作業を進めています。十二月には、資料の所在を新たに確認できた明治時代の南方地区の字図を中心に写真撮影し、ルートの復原案を作成しました。さらに、大分県との境にある梓峠や、大峽と稲葉崎の間に位置する小梓峠などの踏査を実施しました。このうち梓峠では、明治時代以前に使用されていたと思われる古道を見つけることができました。

## 考古部会



▲調査風景(宮崎県埋蔵文化財センター)

延岡市大貫町にある大貫貝塚は、九州でも最古級の貝塚で、これまでに浜田耕作博士や國學院大學などによる調査が行われています。考古部会では、そのうち宮崎県埋蔵文化財センターが保管している昭和三十二(一九五七)年に宮崎大学が発掘調査した資料の調査を進めています。さらに、その調査に参加された田中茂氏(元北川町教育長)にも当時の写真を見せたいいただきながら、貝塚の状況等についてのお話を伺いました。

## 民俗部会



▲人生儀礼の聞き取り調査風景

合併前に発行された市史や町史等各種資料を検討し、今後調査対象とすべき祭りや年中行事の特定を行っています。また、市北部を中心に、人生儀礼の聞き取り調査を実施し、その成果を整理・検討する作業を行っています。市南部についても、人生儀礼に関して聞き取り調査を実施する予定です。さらに、宮崎県文書センターで『神社明細帳』を含めた精査や、ひかり拓本による石碑の読み取り調査を実施する予定です。

## 近現代部会



▲令和5年度第2回目近現代部会

十一月に今年度第二回目の近現代部会を開催し、次年度の史資料編一の発行に向けて、掲載史料等に関して活発な議論を行いました。現在、近現代部会では、明治一〇(一八七七)年に勃発した西南戦争に関する史料調査を進めています。また、明治大学博物館所蔵内藤家文書や延岡城・内藤記念博物館寄託史料を閲覧したほか、延岡市内の公民館などに残る史料を近世部会と合同で調査・撮影するなど、延岡市に関係ある史料調査と整理を進めています。

## 近世部会



▲史料調査風景(公益財団法人三井文庫)

史資料編一、二の刊行に向けた準備を進めています。十二月には、公益財団法人三井文庫(東京都)において、譜代大名牧野氏に関する史料調査を行いました。また、今後、岡山大学附属図書館所蔵三浦家文書「日録」の原本照合を行う予定です。延岡藩主に関する史料のみならず、延岡の地方文書調査も進めており、これまでに市内各公民館所蔵史料の調査を行っています。



# 「新しい江戸イメージと延岡藩」 ～21世紀からの視点～

おおいし まなぶ  
講師：大石 学 氏

- 日時** 令和6年3月9日(土) 14時から
- 会場** カルチャープラザのべおか 多目的ホール (1階)
- 主催** 延岡市、延岡市教育委員会



## 大石 学 氏の経歴

1953年 東京都生まれ 70歳  
東京学芸大学大学院修士課程修了  
筑波大学大学院博士課程単位取得満期退学  
元名城大学助教授  
東京学芸大学名誉教授 (元副学長)  
前日本芸術文化振興会監事  
時代考証学会会長  
専門：日本近世史

### 主な時代考証

- ・映画「るろうに剣心」(2012、2014年)
- ・大河ドラマ「西郷どん」(2018年) など

### 主な著書

- ・『新しい江戸時代が見えてくる―「平和」と「文明化」の265年―』(吉川弘文館、2014年)
- ・『敗者の日本史16 近世日本の勝者と敗者』(吉川弘文館、2015年) など

**【参加申込】 参加費無料(事前申込が必要です) 申込〆切 2月29日(木) 17:00まで**

※参加申込みは電話・FAX・メール・ロゴフォームにて。

お申込みの際に、氏名・電話番号、参加人数をお知らせください。

託児を希望される方は、お子さまの人数・年齢をお知らせください。

**【申込先】** 延岡市文化財・市史編さん課  
TEL：(0982)22-7047 / FAX：(0982)34-6438

Email：bunka@city.nobeoka.miyazaki.jp

ロゴフォームからの申込みは、  
右のQRコードよりお申込みください。



参加者には  
のべおかCOIN  
200ポイント  
プレゼント!

## 編集後記

今号で紹介した、駅弁掛紙。大正十二(一九二三)年に日豊本線が全通し、人々の移動が増えるなか、車内販売や駅弁は旅の楽しみの一つだったと思います。

駅弁にまつわるエピソードを親戚の叔父さんから聞いたことがあります。彼が幼かった頃は、火室内で石炭を燃焼し、発生した蒸気を推進力に客車を牽引する蒸気機関車の時代でした。当時は冷房もなく、夏は窓を開けて外気を取り入れて涼みながらの列車の旅でした。幼かった頃のある夏の日、家族とともに延岡から北川へ向かう汽車に乗りました。車内で駅弁を食べようとした時のことです。汽車がトンネルに入り、開けた窓から煤煙が車内に入り、目に煙が入り何も見えなくなって、痛くて泣きながら駅弁を食べたことが今でも記憶に残っているそうです。

私も学生時代に車内販売の駅弁を楽しみにしていましたが、昨年一〇月に東海道新幹線のぞみ・ひかり内での車内販売も中止となるニュースを聞いて寂しい気持ちになりました。ですが、今でも各地で駅弁フェアが開催されるなど、ご当地グルメ満載の駅弁の魅力は褪せることなく、人気を博しています。

(市史編さん係員)

